バローチー語と同様に？
― 21 世紀のブラーフイー語文法概要を作る試み（1）

村山和之

――要旨

本研究ノートは、バローチ人とともにバローチ民族の片翼を構成するブラーフイ人によって話されているブラーフイー語の概要を、音韻、名詞、形容詞、代名詞、数詞にわたって、現地調査の結果として報告するものである。

ブラーフイー語 Brāhuī とは、ドラヴィダ語族北部ドラヴィダ語派に属する言語で、パキスタンのバローチスターン州、スィンド州、アフガニスタン南東部、イランのスィースターン・バルーチェスターン州に居住するブラーフイ人の母語である。

ブラーフイ人の故地は、バローチスターン州を南北に貫く中央ブラーフイー山脈であり、その語域は北部をイラン語派のパシュトー語、西部をイラン語派バローチー語、東部をバローチー語とインド語派のスィンディー語、南部をスィンディー語によって取り囲まれた孤島の様相を呈している。

本稿では、パキスタン・バローチスターン州のブラーフイー語に見られるサラーワーニー方言 Sarāwānī（北部、中央部）、ジャラーワーニー方言 Jhalāwānī（南部）、ラフシャーニー方言 Raxshānī（西部）、スィンディー方言 Sindhī（東部）の中から、南限は中央ブラーフイー山脈中の旧都カラート Kalāt 周辺から、北限は州都クエッタ Quetta にまで及び、公共放送や刊行物の標準的言語となるサラーワーニー方言を扱う。

はじめに

本稿を組み立てるために用いた先行業績でありモデルは、『バローチー語基礎 1500 語』［縄田］(1) の後半部（pp.97-157）を構成する「バローチー語文法概要」である。

インド・ヨーロッパ語族イラン語派の北西方言群に属するバローチー語 Balōchī は、ブラーフイ人にとって最も密接な関係にあり、多くの語彙を共有するばかりか、日常・非日常的にもほぼ同様の民族文化をもつバローチ人の言語である。したがって［縄田］のバローチー語においてなされた言語調査の手法による業績をなぞってブラーフイー語を観察することで、両言語の類似性や差異がいっそう鮮明になるはずである。

加えて［縄田］が扱っているバローチー語ラフシャーニー方言は、ブラーフイー語にお

けるサラーワーニー方言に相当し、実際にこの二言語二方言の語域は接触しあっていることからも、使用語彙と地理的位置においてもっともブラーフイー語に近いバローチー語方言として有効な比較作業を可能にするはずである。

［縄田］をテクストとして、ブラーフイー語の対照調査の教授は、旧知のバローチスターン大学文学部ブラーフイー学科のリアーカット・サニー博士 Dr.Liāqat Sanī Badūzaī に頼んだ。

サニー博士は若き言語学者･文学者で、母語のブラーフイー語サラーワーン方言･デーフワーリー語 Dēhwārī・バローチー語・ウルドゥー語・英語を不自由なく話せる。いまパキスタンにおいて、ブラーフイー語を母語としてだけではなく言語学の研究対象として語れる稀有な研究者であり、ブラーフイー語の正書法や標準語設定の道を模索する挑戦者でもある。

ブラーフイー語研究の先学デニズ・ブレイ Denys de S.Bray が大著『ブラーフイー語』(2) The Brahui Language（1909）の第三部として著した「語彙集」Part III.Etymological Vocabulary（1934）も本作業には大いに参照した。

本稿は、いうなれば縄田鉄男のバローチー語用の原作を、リアーカット・サニーがブラーフイー語に翻案し、ブレイに故きを尋ね、それらを著者：村山和之が構成した初稿台本である。

これがささやかなたたき台となり、21 世紀における今後のブラーフイー語研究に寄与できれば無上の喜びである。

I. ブラーフイー語の文字、音韻

I-1. ブラーフイー語アルファベット

順位	名称	単独字	順位	名称	単独字
1	alif	ا	16	shā	ش
2	bā	ب	17	‘gō	غ
3	pā	پ	18	fī	ف
4	tū	ت	19	kē	ک
5	ṭī	ٹ	20	gō	گ
6	jī	ج	21	lī	ل
7	chā	چ	22	ēlō lī	ڵ
8	xō	خ	23	mō	م
9	dē	د	24	nī	ن
10	ḍē	ڈ	25	ēlō nī	ں
11	rī	ر	26	wā	و
12	ṛē	ڑ	27	hē	ہ
13	zē	ز	28	chunkā yā	ی
14	zhē	ژ	29	ballā yā	ے
15	sā	س			

I-2. ブラーフイー語の音素体系

I-2a. 母音音素

バローチー語同様に、ブラーフイー語には短母音 3、長母音 5 からなる 8 母音がある。

短母音 / i, u, a

lix〈頸〉　chukk〈鳥〉 amb〈マンゴー〉

長母音 / ī, ē, ā, ō, ū

īṛ〈姉妹〉　ēlōdē〈明後日〉 ālum〈家族〉　ō〈彼・彼女〉　ūrra〈雷〉

1. / i / 前舌非円唇広め狭母音、日本語の「イ」と「エ」との中間音
2. / u / 後舌円唇広め狭母音、日本語の「ウ」と「オ」の中間音
3. / a / 中舌非円唇広め半狭母音、日本語の「ア」
4. / ī / 前舌非円唇狭母音、日本語の「イー」とだいたい同じ音
5. / ē / 前舌非円唇半狭母音、日本語の「エー」
6. / ā / 中舌非円唇広母音、日本語の「アー」
7. / ō / 後舌円唇半狭母音、日本語の「オー」
8. / ū / 後舌円唇狭母音、日本語の「ウー」

I-2b. 鼻母音

バローチー語と同様に、ブラーフイー語には 5 つの鼻母音がある。

/ ã, ĩ, ũ, ẽ, õ/ は、/ ān, īn, ūn, ēn, ōn /と交替する。

文字では点（ヌクタ）のないエーロー・ニー ں を用いる。語中ではニー ں をとる。

yãzda〈11〉　gichĩ〈選ばれた、ベターな〉　lũṇding〈這う〉　［Bray, 195］

sẽnzda〈13〉　nõzda〈19〉

I-2c. 二重母音

ブラーフイー語には、3 つの二重母音がある [3]。

/ aī, aē, aō /

文字では母音連続を示す記号ハムザ（ ء ）を用いる。

Ahmadzaī　〈アフマドを始祖とする氏族集団、アフマドザイー族〉

kaē　〈理解〉

paōr　〈北極星〉

I-2d. 子音音素

バローチー語とほぼ同様に、ブラーフイー語には 27 の子音音素がある。

ブラーフイー語にはバローチー語にみられる声門閉鎖音があらわれず [4]、バローチー

語や周囲の諸言語にはない無声歯茎側面摩擦音[5]が存在する特徴がみられる。

バローチー語と同様に、ブラーフイー語には、ウルドゥー語やスィンディー語などに顕著な無気音と有気音（帯気音）の対立がみられない。

スィンディー語との接触が多く、影響を大きく受けた南部ジャラーワーン地方では、一部の単語に有気音があらわれ、h の中字を添えて表記している。ブレイも、*bhāz*, Many［var.of bāz］［Bray,72］のように扱っているように、正書法が確立していない現実では、一部の無気音と有気音の表記は混在しているといえる。

ペルシア語、アラビア語、ウルドゥー語、パシュトー語、バローチー語、スィンディー語からの借用語は、一部はその綴り方を残して使用されている。

破裂音 / p, b, t, d, ṭ, ḍ, k, g	流　音 / l, r, ṛ
破擦音 / ch, j	喉　音 / h, x, ‘g
摩擦音 / f, s, z, sh, zh	側面摩擦音 / <u>lh</u>[6]
半母音 / w, y	鼻　音 / m, n

/ p /　日本語の「パ」行の子音。
/ b /　日本語の「バ」行の子音。
/ t /　日本語の「タ」の子音。
/ d /　日本語の「ダ」の子音。
/ ṭ /　舌先を反らして後部歯茎に接して、/ t /を発音する反り舌音。
/ ḍ /　同上の有声音。
/ k /　日本語の「カ」行の子音。
/ g /　日本語の「ガ」行の子音。
/ ch /　「チャ」、英語の ch の音。
/ j /　「ジャ」、英語 just の j の音。
/ f /　「ファ」、英語 five の f の音。
/ s /　日本語の「サ」の子音。
/ z /　「ザ」、英語 zoo の z の音。
/ sh /　日本語の「シ」の子音。
/ zh /　同上の有声音、英語 pleasure の s の音。
/ m /　日本語の「マ」行の子音。
/ n /　日本語の「ナ」行の子音。
/ l /　英語 light の l の音。
/ <u>lh</u> /　舌端を歯茎につけて舌の中央に閉鎖を作り、舌の両脇の隙間から空気を通して作る摩擦音。
/ r /　舌先を震わす r 音。

/ ṛ /　舌先を反らして後部歯茎に接して、/ r /を発音する反り舌音。歯茎弾音。
/ h /　英語 hit, hill などの h の音。
/ x /　奥舌面と軟口蓋最後部との間で狭めの形で作られる摩擦音。喉近くで発音する「ハ」。
/ ‘g /　同上の有声音。喉近くで発音する「ガ」。
/ w /　日本語の「ワ」の子音。
/ y /　日本語の「ヤ」の子音。

I-3. アクセント

バローチー語同様、ブラーフイー語でも語の末尾に強さアクセントがくる。

kurnū́〈焼き石を核にした丸パン〉　‘gallá〈小麦〉　(Bal. gallag)
dishtā́r〈婚約者〉　īlúm〈兄弟〉

I-4. 語頭子音連結

jwān〈良い〉(Bal. jwān)　gwan〈野生のピスタチオ〉
draxt〈木〉(Bal. drachk)　prung〈赤い石のビーズ〉(7)

I-5. 語末子音連結

sāng〈婚約〉(Bal. sāng)　kumb〈瀞〉
padr〈相続、伝統〉　bālisht〈枕、クッション〉

I-6. 語中二重子音

paṭṭing〈捜す〉(Bal. paṭṭag)　minnat〈親切、恩顧〉
xarrun〈緑〉　kukkuṛ〈鳥〉

I-7. 語末二重子音

xann〈目〉(Bal. chamm)　kaṭṭ〈ベッド〉(Bal. kaṭṭ)
kuchakk〈犬〉(Bal. kuchakk)　murr〈遠い〉

II. 文法

バローチー語同様に、ブラーフイー語には、名詞・代名詞・形容詞・動詞・副詞等のように語形変化を行うものと、前置詞・後置詞・接続詞・間投詞等のように不変化のものとがある。

II-1. 名詞

II-1a. 数

ブラーフイー語の名詞には、ウルドゥー語やスィンディー語そしてパシュトー語が有する性（男性名詞、女性名詞）による区別はなく、バローチー語（バ語）と同様に単数と複数の区別だけがある。

単数に k / āk / ‘gāk を付して複数を形成する。

ira‘g〈パン、食事〉	ira‘gk〈複数のパン〉
hullī〈馬〉	hullīk〈複数の馬〉
kuchakk〈犬〉	kuchakkāk〈複数の犬〉
chavaṭṭ〈革サンダル〉	chavaṭṭāk〈複数の革サンダル〉

短母音 a の後では、‘gāk をとる。語末の短母音 a を表わすために無音の h 文字が添えられる。

lummah〈母〉	lummah‘gāk〈母たち〉
chūchah〈乳飲み子〉	chūchah‘gāk〈乳飲み子たち〉

短母音の後の子音 r は kk に、ṛ は/nk に交替する。

xabar〈ニュース〉	xabakk〈ニュース〉(8)
kasar〈道、路〉	kasakk〈道、路〉
masiṛ〈娘〉	masink〈娘たち〉
īṛ〈姉妹〉	īnk〈姉妹たち〉
malxuṛ〈嫁〉	malxunk〈嫁たち〉
bal‘guṛ〈姑〉	bal‘gunk〈姑たち〉

必ずしもすべての名詞に共通するルールではないが、集合した動物、動物の群れを表わす時、gal、gala という語が用いられる。

galapān〈馬の群れ〉(9)	galasagg〈犬の群れ〉

II-1b. 定・不定

バローチー語と同様に、名詞はそれ自体で定的である。不定を表わすには、接尾辞 as を用いる。as はアクセントをとらない。母音の後では、‘gas をとる。

kuchakk〈犬〉	kuchakkas〈ある犬〉
kuchakk〈犬〉	kuchakke〈ある犬〉（Bal.［縄田, 103］）

定名詞は、形容詞的用法の数詞を伴うとき、原則として複数形をとらない。

kuchakkas〈ある犬〉	
asi kuchakk〈一匹の犬〉(10)	irā kuchakk〈二匹の犬〉
kuchakkāk〈複数の犬〉	

II-1c. 属格

所有格または属格の語尾は、単数-nā、複数-tā。(Bal. 単-‘ay、複-‘ī ［縄田, 103］)[11]

単数語尾、複数語尾ともに定名詞形（基本形、単数形）にそえられる。不定を表わす as は、バローチー語と同様に属格語尾に先行する。

chunā nā〈(単数の) 子供の〉[12]　　chunā tā〈(複数の) 子供たちの〉[13]

chunā nā kuchakk	〈(単数の) 子供の（単数の）犬〉
chunā ase nā kuchakk [14]	〈(不定の) 子供の（単数の）犬〉
chunā nā kuchakkāk	〈(単数の) 子供の（複数の）犬〉
chunā ase nā kuchakkāk	〈(不定の) 子供の（複数の）犬〉
chunā tā kuchakk	〈(複数の) 子供たちの（単数の）犬〉
chunā tā kuchakkāk	〈(複数の) 子供たちの（複数の）犬〉

パキスタンの国語ウルドゥー語において所有格を作る後置詞は、-kā 単数男性名詞、-kē 複数男性名詞・単数男性名詞の斜格形、-kī 単数・複数女性名詞のように、修飾される名詞の前で、その性・数によって活用するが、ブラーフイー語の場合は修飾する主体が単数か複数かによってのみ属格語尾が選択されることになる。

II-1d. 斜格

斜格は、単数では ē、複数では tē をとる。複数形の活用タイプによっては、ātē, ‘gātē の形が表れるが、いずれも複数形語尾の音 k を省き tē を添えた形と考えてよい。

以上まとめると格語尾は次の通りである。

	ブラーフイー語		バローチー語	
	単数	複数	単数	複数
主格	ゼロ	-k, -ak, -āk, -‘gāk	ゼロ	-a / -ān
属格	-nā	-tā	-ay	-ānī
斜格	-ē	-tē, ātē, ‘gātē	-ā	-a / -ān

II-1d-1　斜格形の用法：バローチー語と異なる場合

(i) バローチー語と異なり、ブラーフイー語の斜格形　-ē / -tē は方向・場所を表わさない。所格形 -ā / -‘gā を用いて表わす。

urā〈家〉　urā‘gā〈家へ〉　(cf.urā ē　とはならない)[15]

ī Karachi ā kava.　〈私はカラーチーへ行きます〉

man Karachi ā ravīn.〈私はカラーチーへ行きます〉(バローチー語)

(ii) バローチー語と異なり、ある動詞の定的な単数主語を表わさない。

bazgar aē mulkē langār karē.〈小作人があの土地を耕した〉

bazgarā ā mulkā langār kurt.〈小作人があの土地で耕した〉（バローチー語）

II-1d-2　斜格形の用法：バローチー語と共通する場合

(i) バローチー語と同様に、他動詞の定的目的語を表わす。

num kanā hītē gīrām karērē.　〈あなたは私の言葉を忘れた〉

shumā manī habarā shamōshtit.　〈あなたは私の言葉を忘れた〉（バローチー語）

ī dā xallē harifēva.　〈私はこの石を持ち上げる〉

man ē sangā zurīn.　〈私はこの石を持ち上げる〉（バローチー語）

dā kārēmē kēv.〈（私は）この仕事をしようと思う〉［Bray, 133］

mutknā hōmānē yāt karēnē.〈（家畜は）古い居場所（牧草地）を憶えていた〉［Bray, 139］

(ii) 目的語が並立する際には間接目的語に表れる。

dā ṭēkī niyāṛīē ētik.　〈この贈り物をご婦人にさしあげよ〉

dā ṭēkī niyāṛītē ētik.　〈この贈り物をご婦人方にさしあげよ〉

nī chunāē mēlhas tissus.　〈君は子供に羊を一頭あたえた〉

nī chunātē mēlh tissus.　〈君は子供たちに複数の羊をあたえた〉

ī lummahē salām pāva.　〈私はお母さんにサラームを言う〉

ī lummah‘gātē salām pāva.　〈私はお母さん方にサラームを言う〉(16)

II-2. 形容詞

バローチー語と同様に、形容詞には、数、格による語形変化はない。比較法においても形容詞自体には語形変化はなく、この範疇においてはバローチー語と異なる。

II-2a. 限定的用法

限定的用法の形容詞は、名詞に先行し、(i) 語尾-ā / -ō、より特定・強調される場合は、(ii) -ingā をとる。(i) のうち-ā は定的名詞を、-ō は不定名詞を修飾する際に選択される。

pīhun〈白い〉

(i) ē pīhunā kūs ē.　〈あれは白い服です〉

ē pīhunō kūsas ē.　〈あれはある白い服です〉

(ii) ē pīhuningā kūs ē.　〈あれこそ（まごうことなき）白い服です〉

II-2b. 叙述的用法

ē kūs pīhun ē.　〈あの服は白いです〉

dā hullī ballun ē.　〈この馬は大きいです〉

II-2c. 比較法

比較級は、原則として形容詞の前に奪格の後置詞-ān〈～より－〉をとる。また、形容詞に-ingā を添える場合も確認されている。最上級は、形容詞の前に kull ān〈全てより－〉をとる。

jwān〈良い〉

dā kitāb ōṛān jwān ē. 〈この本はあれよりも良いです〉

dā kitāb kull ān jwān ē. 〈この本は全てより良いです（最も良いです)〉

jwān は、比較級で [17] jwāningā、最上級で zyāst jwān の語で表わされることもある。

II-2d. 形容詞の語例

mur‘gun〈長い〉

dā mur‘gunā kasar ē. 〈これは長い道です〉 限定的用法定的 A1.

dā mur‘guno kasaras ē. 〈これはある長い道です〉 限定的用法不定的 A2.

dā kasar mur‘gun ē. 〈この道は長いです〉 叙述的用法 B.

gwanḍ〈短い〉

ē gwanḍingā chiṭṭ ē. 〈あれが本当に短い紐です〉 A1.（強調）

ē gwanḍo chiṭṭas ē. 〈あれはある短い紐です〉 A2.

ē chiṭṭ gwanḍ ē. 〈あの紐は短いです〉 B.

ballun〈大きい〉

ō ballunā （ballā） hullī ē. 〈それは大きい馬です〉 A1.

ō balluno （ballo） hullīas ē. 〈それはある大きい馬です〉 A2.

ō hullī ballun ē. 〈その馬は大きいです〉 B.

chunakk〈小さい〉

dā chunkā mār ē. 〈これは小さな（下の）息子です〉 A1.

dā chunko māras ē. 〈これはある小さい（下の）息子です〉 A2.

dā mār bāz chunakk ē. 〈この息子はたいへん小さいです〉 B.

bāsun〈暑い、熱い、温かい〉

sēbī bāsuningā mulk ē. 〈スィッビーは文句なく暑い土地・場所です〉 A1.

sēbī bāsuno mulkas ē. 〈スィッビーはある暑い土地・場所です〉［Bray,66］A2.

dā ira‘g bāz bāsun ē. 〈このパン（食べ物）はとてもアツアツ焼きたてです〉B.

pudēn〈寒い、冷たい〉

dā pudēnā ira‘g ē. 〈これは冷たい（冷めた）パンです〉 A1.

dā pudēno ira‘g as ē. 〈これは冷たい（冷めた）パンというものです〉 A2.

dā ira‘g pudēn ē 〈このパンは冷たいです（冷めています)〉B.

bāz〈多い、たくさんの〉

dā bāzingā kitāb ō. 〈これらはあふれんばかりの本です〉 A1.

dāṛē kitābāk bāz ō. 〈ここには本がたくさんあります〉 B.

machchi (ṭ)〈少ない、少しの〉

dā machchiṭā būra tē kanē tiss. 〈(彼は) この少しの砂糖を私にくれた〉 A1.

dā machchiṭō būras kanē tiss. 〈(彼は) このいくばくかの砂糖を私にくれた〉 A2.

dā būrāk bāz machchiṭ ō. 〈この砂糖は大変少ないです (ほとんどないです)〉 B.

murr〈遠い、離れた〉

murringā shahrā hinā. 〈彼・彼女は遠い町へ行った〉[Bray,211] A1.

murrō shahras (ē) ā hinā. 〈彼・彼女はある遠い町へ行った〉 A2.

Mastung dākān axa murr ē ? 〈マストゥングはここからどれくらい離れていますか〉 [Bray,211] B.

xuṛk〈近い、そばの〉

ō xuṛkingā gidānē hur. 〈その近くのテントを見よ〉

ō xuṛko gidānas hur. 〈その近くの (どれでもいいから) テントを見よ〉

Mastung Shālān xuṛk ē. 〈マストゥングはクエッタから近いです〉

II-2e. 指示形容詞

dā〈この〉 dā chūcha〈この赤ちゃん〉

dā chūchāk〈この赤ちゃんたち〉

ō〈その〉 ō julūnṭ〈その揺り籠〉

ō julūnṭāk〈その (複数の) 揺り籠〉

ē〈あの〉 ē changāshk〈あの蟹〉

ē changāshkāk〈あの (複数の) 蟹〉

hamē〈あそこの〉 hamē gidān〈あそこのテント〉

hamē gidānk〈あそこの (複数の) テント)〉

II-2f. 疑問形容詞

amar〈どんな、如何なる〉

nī amar us ? 〈君は (ご機嫌) いかがかな ? 元気ですか ? 〉

pīmāz amar ē ? 〈玉葱 (のでき具合) はどうですか ? 〉

dā amarō kitābas ē ? 〈これはどんな類いの本ですか ? 〉

amaringā banda'g-a-tē xwānifēsa ? 〈どんな人々に教えているのですか ? 〉

aṭ〈どれだけの、どのくらいの〉 How many (数)

ṭēm aṭ kān. 〈何時 (になったのだ ?) 我々は行こうか〉

aṭ dē-a-nā safar marēk ? 〈何日くらいの旅になるでしょうか ? 〉

aṭ kitāb ō ? 〈何冊の本があるか ? 〉

aṭ urā ō ? 〈何軒の家があるか？〉

aṭ Ph.D xwāninda ō ? 〈何人の博士課程学生がいるのか？〉

nā umr aṭ sāl ē ? 〈君の年齢は何歳であるか？〉

axas〈どれだけの、どのくらいの〉[18] How much（量）、How many（数）

axas dīr ō ? 〈どれほどの水量がありますか？〉

axas būra ō ? 〈どのくらいの砂糖の量ですか？〉

axas pāl<u>h</u> ō ? 〈どれだけ乳の量がありますか？〉

axas panna ‘gātā kitābas ē ? 〈何ページ（数）の本ですか〉

axas kitāb ō ? 〈何冊の本があるか？〉

axas urā ō ? 〈何軒の家があるか？〉

II-2f. 不定形容詞

mana〈ある、いくらかの、多少の〉

mana sālas hamōṛē tūs. 〈数年、彼はそこに住んだ〉［Bray,200］

kull〈すべての〉

kull chunāk tēnā kitāb-a-tē xwānir. 〈全ての子どもたちが自分の本を読む〉

‘guṭṭ〈すべての〉

‘guṭṭ chunāk tēnā kitāb-ā-tē xwānir. 〈全ての子どもたちが自分の本を読む〉

tīvah [19]〈全部の〉

tīvah chunāk tēnā kitāb-a-tē xwānir. 〈全ての子どもたちが自分の本を読む〉

hichch〈何も・・・ぬ〉〈いかなる・・・も・・・ぬ〉（否定詞と共に）

kanā urāṭī hichch kas aff. 〈私の家には誰もいない〉

kamm〈少しの〉

kamm kamm bē shā‘gik. 〈ほんの少しの塩をふりかけよ〉

dīxa / dīxas〈少しの〉[20]

dīxas bē kanē ētē. 〈ほんの一つまみの塩を私にください〉

machchi〈少しの〉

machchi sī kanē ētē. 〈少しばかりの油を私に下さい〉［Bray, 197］

ziyāt〈多くの、大多数の〉

ziyāt banda‘gāk Makka ‘gā kāra. 〈多くの人たちがメッカへ行きます〉

bāz〈多くの、大多数の〉

bāz banda‘gāk dāṛē bassur. 〈多くの人たちがここへ来た〉

waṛ waṛ〈様々の、いろいろの〉

nā dukkanaṭī waṛ waṛ nā giṛāk ō. 〈君の店には様々な品物がある〉

ḍawl ḍawl〈様々の、いろいろの〉

kanā dukkanaṭī ḍawl ḍawl nā giṛāk ō. 〈私の店には様々な品物がある〉

II-3. 代名詞

バローチー語と同様に、代名詞には、人称代名詞・指示代名詞・疑問代名詞・不定代名詞・再帰代名詞がある。人称代名詞には、自立語的（独立的）代名詞と前接的代名詞がある。サラーワーニー方言では前接的代名詞が、ジャラーワーニー方言やラフシャーニー方言と比較して、用いられなくなる傾向にある。

II-3a. 独立人称代名詞

II-3a-1 独立人称代名詞の主格形は次の通りである。

	単　数	複　数
1 人称	ī〈私〉	nan〈我々〉
2 人称	nī〈君・あなた〉	num〈あなたがた・あなた〉
3 人称	dā〈彼・彼女〉	dāfk〈彼ら・彼女ら〉
	ō〈彼・彼女〉	ōfk〈彼ら・彼女ら〉
	ē〈彼・彼女〉	ēfk〈彼ら・彼女ら〉
	hamē〈彼・彼女〉	hamēfk〈彼ら・彼女ら〉

3 人称は近くから遠くへ順に、dā＜ō＜ē＜hamē となり、複数形には-fk が伴う。

ウルドゥー語の影響なのか、2 人称複数形 num（ヌム）を 2 人称単数に対して「あなた」の意味で用いる傾向にある。しかし、原則として「ブラーフイー語に敬語はない」(故ナーディル・カンバラーニー教授の言葉）ので、目上の人に対して nī（ニー）を用いることは間違いではない。

II-3a-2. 独立人称代名詞の属格形は次の通りである。

	単　数	複　数
1 人称	kanā〈私の〉	nanā〈我々の〉
2 人称	nā〈君・あなたの〉	numā〈あなたがた・あなたの〉
3 人称	dānā〈彼・彼女の〉	dāftā〈彼ら・彼女らの〉
	ōnā〈彼・彼女の〉	ōftā〈彼ら・彼女らの〉
	ēnā〈彼・彼女の〉	ēftā〈彼ら・彼女らの〉
	hamēnā〈彼・彼女の〉	hamēftā〈彼ら・彼女らの〉

II-3a-3. 独立人称代名詞の対格形は次の通りである。

	単　数	複　数
1 人称	kanē〈私に〉	nanē〈我々に〉
2 人称	nē〈君・あなたに〉	numē〈あなたがた・あなたに〉
3 人称	dādē〈彼・彼女に〉	dāftē〈彼ら・彼女らに〉

ōdē〈彼・彼女に〉	ōftē〈彼ら・彼女らに〉
ēdē〈彼・彼女に〉	ēftē〈彼ら・彼女らに〉
hamēdē〈彼・彼女に〉	hamēftē〈彼ら・彼女らに〉

II-3b. 前接的人称代名詞

	単　数	複　数
1 人称	-ka〈私の/ 私に・を〉	-nanā〈我々の/ 我々に・を〉
2 人称	-na〈君の/ あなたに・を〉	-numā〈あなたがたの/ あなたに・を〉
3 人称	-ta〈彼の/ 彼女に・を〉	-ōtā〈彼らの/ 彼女らに・を〉
		-ētā〈彼らの/ 彼女らに・を〉

バローチー語と同様、前接的人称代名詞は存在し、目的語としての用法、所有格としての用法がある。しかしサラーワーニー方言では、目的語としては独立人称代名詞の対格形を、所有格としては独立人称代名詞の属格形用いるのが一般的であるといわれている。3 人称単数の-ta は現在でも頻繁に使われている。

(i) 目的語としての用法

ī mū‘giva-ta.〈私はそれを縫う〉

nishān ētē-ta.〈それを見せてください〉

ōdē nishān ētē-ta.〈彼・彼女にそれを見せてください〉

(ii) 所有格としての用法

mulk-ka pudēn ē.〈私の国は涼しい〉

mulk-na amar ē ?〈あなたの国はいかがですか ? 〉

mulk-ta ōṛē ān bāsun aff.〈彼・彼女の国はその（国）よりは暑くありません〉

II-3c. 指示代名詞

dā	〈これ、この事、この人〉
ō	〈それ、その事、その人〉
ē	〈あれ、あの事、あの人〉
hamē	〈あそこ、あの事、あの人〉

次のような語形変化をする。

	主　格	属　格	（斜格）	対　格
単　数	dā	dānā	dāṛ	dāṛā
	ō	ōnā	ōṛ	ōṛā
	ē	ēnā	ēṛ	ēṛā
	hamē	hamēnā	hamēṛ	hamēṛā

複　数	dā	dātā	dāft	dāftā / dāftēā
	ō	ōtā	ōft	ōftā / ōftēā
	ē	ētā	ēft	ēftā / ēftēā
	hamē	hamētā	hamēft	hamēftā / hamēftēā

斜格は後置詞と共に用いられる。

dā tōn　〈これと、これと一緒に〉（主格＋後置詞）[21]
dāṛ tōn　〈これと、これと一緒に〉（斜格＋後置詞）
ēṛtōn　〈あれらと共に〉（斜格＋後置詞）
ēftōn　〈あれらと共に〉（斜格＋後置詞）

II-3d. 疑問代名詞

ant　〈何、どんな物〉
dā antas ē ?　〈これは何ですか？〉
dēr, dē　〈だれ、どなた〉
nī dēr us ?　〈あなたは誰ですか？〉
nā pin dēr ē ?　〈あなたの名前は何ですか？〉
arā, harā　〈どれ、どの人〉
arā jāga nā banda‘gas ē ?　〈彼はどこのひとか？、どの場所のひとか？〉
nī arā xōmasi us ?　〈あなたはどの部族の構成員ですか？〉

II-3e. 不定代名詞

machchiṭ　〈少し、僅か〉
bāz　〈多く、多数〉
pēn　〈他のもの、他のひと〉

II-3f. 再帰代名詞

(i) tēn（self）

主格 tēn、属格 tēnā、対格 tēnē / tēnē ā

ī	tēnaṭ	tēnā	kārēmē	kēva.
私は	自身で	私自身の	仕事を	する。
ōfk	tēnaṭ	tēnā	kārēmē	kēr.
彼らは	自身で	彼ら自身の	仕事を	する。
nī	tēnē	kumbaṭī	hurrisa.	
君は	君自身を	瀞の中に	見る。	

(ii) jind (body, self)

主語の属格と共に用いられる。

主格 -nā jind、属格 -nā jind nā、対格 -nā jindē

(ī)	kanā jind	kēva.	
(私は)	私自らが	する。	
nā jind nā	kārēmē	ī	kēv ?
あなた自身の	仕事を	私が	してよいか ?
ō	ōnā jindē	pārē.	
彼は	彼自身へ	告げた。	

II-4. 数詞

II-4a. 基数詞 (cardinals)

基数詞は次の通りである。1~3 以外は、ほぼバローチー語と同様である。

1	asiṭ	11	yz̃da	30	sī	301	musi sad-o asiṭ
2	iraṭ	12	dwz̃da	40	chill	402	chār sad-o iraṭ
3	musiṭ	13	sẽzda	50	panjā	503	panj sad-o musiṭ
4	chār	14	chz̃rda	60	shast	1000	hazār
5	panch	15	pz̃zda	70	haftād	2000	irā hazār
6	shashsh	16	shz̃zda	80	hashtād	10000	dah hazār
7	haft	17	habda	90	nawad	100000	lakk
8	hasht	18	hazhda	100	sad	1000000	krōṛ
9	noh	19	nõzda	21	bīst-o asiṭ (22)		
10	dah	20	bīst	200	irā sad		

伝統的なブラーフイ社会では、百や千や万の単位の概念が流入して根付くまで、「20(ビースト)」の数が重要な基準となって最大 500 までの数を表わしたという。バローチー語においてどうだったのかはまだ確認できていない。

asi bīst〈20〉 asi bīst-o asiṭ〈21〉 asi bīst-o dah〈30〉 asi bīst-o yz̃da〈31〉

irā bīst〈40〉 musi bīst〈60〉 chār bīst〈80〉 bīst-o panch bīst〈500〉

II-4b. 序数詞 (ordinals)

序数詞は、〈第 1 の〉を除いて、基数詞に接尾辞-mīkō をつける (バローチー語は接尾辞-mī をつける)。

avalīkō〈第 1 の〉、iraṭmīkō〈第 2 の〉、musiṭmīkō〈第 3 の〉

chārmīkō〈第 4 の〉、sad-o hashtmīkō〈第 108 の〉

II-4d. 注意すべき表現

形容詞のように、定的 definite の場合にのみ-ingā / -ā をとるのは、ēn をとるバローチー語と同様である。異なるのは、修飾される名詞がバローチー語では単数形のままであるが、ブラーフイー語では複数形を取る点である。

ブラーフイー語		バローチー語
musi banda‘g	〈3 人の人〉	say mardom
musiṭingā banda‘gāk	〈その 3 人の人〉	sayēn mardom
musiṭā banda‘gāk	〈その 3 人の人〉	
chār sōf	〈4 つのりんご〉	chār sōp
chāringā sōfk	〈その 4 つのりんご〉	chārēn sōp
chārā sōfk	〈その 4 つのりんご〉	
panch hullī	〈5 頭の馬〉	panch ‘asp
panchingā hullīk	〈その 5 頭の馬〉	panchēn ‘asp [23]
panchā hullīk	〈その 5 頭の馬〉	

II-4e. 度量・重量などの表現

バローチー語と同様に、基数詞に単位をつけて表わす。

chār sēr būrah	〈4 セール [24] の砂糖〉
panch pāw bādām	〈5 パーウ [25] のアーモンド〉

II-4d. 時刻の表わし方

「〜時」は baja、「〜分」はminṭ を用い、動詞は anning〈〜である〉の三人称単数である。

「〜分過ぎ、〜分経過している」は動詞 gidrēnging〈過ぎる〉の三人称単数現在完了形 gidrēngānē が用いられる。時間・時刻表現で用いられる数字は、ペルシア語・バローチー語と同様で、ブラーフイー語固有の 1〜3 （asi, irā, musi）は通常使用されていない。

aṭ baja ē ?	〈何時ですか ? 〉
yak baja ē.	〈1 時です〉
dwã̄zda-o nēm baja ē.	〈12 時 30 分、12 時半〉
pāwnē yak baja ē.	〈12 時 45 分〉
panch kamm hasht baja ē.	〈8 時 5 分前〉
haft baja o bīst minṭ ē.	〈7 時 20 分〉
haft ān bīst minṭ gidrēngānē.	(7 時から 20 分経過している、7 時 20 分)
bīst minṭ buṛzā haft baja ē.	(20 分増した 7 時、7 時 20 分)
sē baja ē.	〈3 時です〉
dah baja o pã̄zda minṭ ē.	〈10 時 15 分〉
dah ‘gān pã̄zda minṭ gidrēngānē.	(10 時から 15 分経過している、10 時 15 分)

pā̃zda minṭ buṛzā dah baja ē. (15 分増した 10 時、10 時 15 分)
pāvas buṛzā dah baja ē. (一時間の四分の一 [26] 増した 10 時、10 時 15 分)
sawā dah baja ē. (一時間の四分の一 [27] 増した 10 時、10 時 15 分)

第一部（前半）終了

研究ノート作成中の問題点、今後の展望

1992 年 3 月から 1995 年 7 月まで、筆者はパキスタン・バローチスターン州都クエッタに位置する国立バローチスターン大学文学部言語学科ブラーフイー語専攻に籍を置いてブラーフイー語学習と資料収集の機会を得た。

それ以降 25 年間、筆者はブラーフイー語に関してほぼ何も著してこなかった。言い訳になるが、マテリアルこそあれ、言語学的な調理法を学んでこなかったひけ目があって、せっかくの豊かな素材が、その素材を与え続けてくれた現地の豊かな人材が活かしきれず、別の角度からの文化研究で、食いぶちを稼いでいたのが現状だ。

しかし、25 年たってあたりを見渡すと、バローチスターンに通って学ぶ人間が筆者以外にいなくなってしまったことに気がついた。9/11 事件以降、情勢が悪化するバローチスターン州に以前ほど気楽に入域できなくなってきたこともあるが、多少の危険を省みる飛び込んで行ける魅力的なフィールドとしてバローチスターンを発信してこなかった自分にも責任があるのではないかと感じるようになった。

留学時代の恩師たちは退官し、彼らの教え子たちが学科を率いるようになってからも、時折訪ねては好き勝手尋ねて帰ってゆく中老の日本人非常勤講師に対しての歓待は変わらなかった。

むしろ、若い世代の教官たちは、積極的に他世界とつながり、あらゆる可能性を駆使して自分たちのブラーフイー学を確立しようと切磋琢磨していて、昔の教官たちよりフットワークも軽く、筆者の世代としても交流しやすく、共同作業も現実として可能である環境にいた。

本研究ノートは、以上のような背景から、25 年前の資料をあえて使わずに、現在トップの若き研究者がめざすブラーフイー語世界を記述して、日本語で書いてみようと開かれた。2017 年 3 月と 9 月をこのための調査期間にあてた。

縄田鉄男先生が遺されたブラーフイー語の隣

図 1 asi xafō nā tūt.（片手いっぱいの桑の実）

図 2 asi chank nā tūt.（両掌いっぱいの桑の実）

人バローチー語の文法概要を基に、そっくりブラーフイー語を記述して、ゆくゆくはバローチー語と比較考察できる研究ノートの作成ははたして可能なのだろうか？

いざ始めてみると、21 世紀のブラーフイー学者リアーカット・サニー博士との共同作業の中で、自分が 25 年前に学んでいたブラーフイー語との些細な違いが幾つか露わになってきた。

そのなかで筆者の認識を改めねばならぬと感じたことは、現在のブラーフイー語界では、ブラーフイー語特有な発音を尊重し、より単純明快な――ブラーフイー語アルファベットの範囲内で可能な――表記法の使用を推進する傾向にあるということ。

つまり、アラビア語・ペルシア語・ウルドゥー語などからの借用語・流入語に対して、綴りはそのまま排除せずに、発音は従来のブラーフイー語の持ち音でする。そして、旧来の表記法（退官教授たちはみなこの表記法）を「見て分かりやすく、発音しやすい」観点から、新しい表記法へと移行させる環境作りをしている。二点とも、以前より数段容易になった出版やネット上の表現活動を通して、積極的に既成事実を積み重ねて浸透させ、将来の正書法確立に向けての準備を整える意味があると考える。

わずか四半世紀の間でも、言語というものが人間の手によって変えられてゆくさまを実見し、ブラーフイ人たちが目指す、彼ら将来のブラーフイー語世界を築く実験に加担したくなった。

今回は第一部（前半）として、アルファベット、音韻、名詞、形容詞、代名詞、数詞を扱った。次回は第二部（後半）として、来年度の調査を経て動詞、副詞、前置詞・後置詞、感嘆詞そして文型を扱い、第一部とあわせてブラーフイー語文法概要の概観を完成させるつもりである。はたして、第二部でもブラーフイー語は「バローチー語と同様に」語ることができるのだろうか？

―― 注

（1） 縄田鉄男 1987『バローチー語基礎 1500 語』大学書林 ［縄田］

（2） Bray, Denys De S. 1909 *The Brahui Language, Part I.*
1934 *The Brahui Language, Part II & Part III.*

（3） ［縄田］では、バローチー語の二重母音についての記述はない。

（4） アラビア語起源の単語にあらわれアイン ain の文字で表記される。もちろん文字は使われているが、アリフと同じように発音される。

（5） IPA 番号 148、IPA 表記 ɬ。本稿ではブレイの表記にならって lh で表わす。

（6） ēlō lī（「別のリー文字」の意）で表わされる。この呼称が唱えられる以前は、l（ラーム lām）の文字に三点を加えて書かれることから、lhām（ヒシャームに聞こえる）と称されてきた。現在も依然としてこの呼称はみられる。

（7） ［Bray 1934, 242］

（8） news は文法的には xabakk（ハバック）が正しいが、誤用のまま慣用化された xabarāk（ハバラーク）もテレビニュースで通用している現実にある。

（9） ［縄田, 72］gala (g)〈（馬の）群れ〉, galapān〈馬の群れの番人〉

（10） ［Bray 1934, 205］では、mēlh asi drakhtas ē（the sheep was a tree）のように、数詞 asiṭ「一」の形容詞的

用法 asi「一つの、一頭の」と as を付加された不定名詞 drakhtas（draxtas）「木」がともに見られる。本稿中の原則にしたがうならば、mēlh drakhtas（draxtas）ē となるはずである。ブレイが集めた時代の用例と現在の標準化過程にあるブラーフイー語との対照、批判作業を要する重要な項目である。

(11) 母音の後では、単-'ay 複-'ī ［縄田, 103］。

(12) 不定名詞の属格は、chunā as nā, chunā as tā が文法に則って導けるが、現実は as を除外した形で行われている。→ chunā nā, chunā tā

(13) 原則としては chunāk tā が導けるが、-tā を伴う以上、主体の名詞は複数であることが自明のため、この位置の名詞はあえて複数形を用いない。

(14) chunā as nā と綴られるが、as と nā の間に、実際は短い e（エ）の音が挿入されて発音される。チュナー（ア）セ・ナーのように。

(15) ラフシャーニー方言では、urā'gaē が表れる。

(16) lummah'gāk（pl.）と tē の結合だが、lummah'gāktē とはならず k が排除される。

(17) gichīn〈選択された〉を〈より良い、ベターな〉の意味でも使うことも通常的である。

(18) axa, axar, axadar も同様に用いられる。［Bray,50］

(19) tībah も同様に使われる。

(20) サニー博士（Sanī）によれば、親指と人差し指の二本の指でつまめる量を chũḍī、中指を加えて三本指でつまめる量を chikk の名で表わし（［Bray］には記述なし）、その中間の量が dīxa / dīxas に当たるという。また、［Bray,177］にあるように、サニー博士は「片手のひらいっぱいの、山もりの」量を xafõ と教えてくれた。「両掌いっぱいの」量は chank という。xafõ aṭ tūt kunik, chũḍī aṭ kumpak〈手のひら山盛りにして桑の実を食べなさい、指一つまみでなんか食べちゃダメ〉（図 1. 図 2）

(21) dāṛ の ṛ 音が欠落した結果、主格と同じ dā が使われるようになったと思われる。

(22) bīst-o yak。以下 22: bīst-o iraṭ（do）, 23: bīst-o musiṭ（sē）, 24: bīst-o chār のように、二桁の数のうち下一桁の 1~3 はバローチー語、ペルシア語と同じように数えられる時もある。

(23) ［縄田, 113］には、〈その 5 頭の馬〉の例はなかったが、前述例に照らしておいてみた。

(24) ［Bray, 263］には、セールは"Weight equal to about 2 lbs"とある。1 libra＝1 pound（0.4536kg）なので、1 セールは約 0.91kg（910 グラム）である。

(25) ［縄田, 155］には、1 sēr ＝ 4 pāw とある。1 パーウは、約半ポンド（225 グラム）となる。

(26) pāw（約半ポンド）と同じ語であるが、「四分の一」を表わし pāv と聞こえる。pāvas は pāv+as の不定表現で a quarter。

(27) ヒンディー・ウルドゥー語の影響か。sawā は「（基礎単位となる数よりその）四分の一多い」［古賀/高橋,1329］

―― 参考文献・辞書

縄田鉄男 『バローチー語基礎 1500 語』大学書林、1987 年
NAWATA, Tetsuo 1987 *A Basic 1500 Vocabulary in Balochi Language*. Daigakushorin, Tokyo, JAPAN.

古賀勝郎/高橋　明『ヒンディー語＝日本語辞典』大修館書店、2006 年
KOGA, Katsurou & TAKAHASHI, Akira, 2006 *Hindi-Japanese Dictionary. Taishukanshoten*, Tokyo, JAPAN.

村山和之「ブラーフイー語動詞『死ぬ』の現世界」『和光大学表現学部紀要』16、pp.173-89.
MURAYAMA, Kazuyuki 2016 *Note on a Brahui verb "to die (kahing)" and its vital space*. Wako University, Tokyo, JAPAN.

Bray, Denys De S. 1909 *The Brahui Language, Part I.* 1934 *The Brahui Language, Part II & Part III.*［reprint: 1986, Gian Publishing House, Delhi, INDIA］

Barker, Muhammad Abd-al-Rahman & Mengal, Aqil Khan 1969 *A Course in Baluchi*. McGill University, Montreal, CANADA.

Sani, Liaqat (Dr.) 2005 *Lauz ātā Shōndārī*. (Promotion of words-A Study on the words being forgotten in Brahui Language), Shon Adabi Diwan, Quetta, PAKISATN.